

高崎遺跡

—第69次発掘調査報告書—

平成21年3月

多賀城市教育委員会

序 文

特別史跡多賀城跡をはじめとする多くの遺跡は、本市の歴史が長い年月をかけて連綿と引き継がれてきたことを物語っております。まさに史都にふさわしいこれら貴重な「文化遺産」を後世に伝えていくことは、我々の重要な責務のひとつであります。このため、当教育委員会としても、開発事業との円滑な調整を図りつつ、埋蔵文化財を適正に保護し、その活用に努めているところであります。

さて、本書は平成20年度に受託事業として実施した高崎遺跡第69次調査の成果を記録したものです。本調査では、奈良時代の堅穴住居跡を発見し、多賀市の歴史を解明するうえで貴重な資料を提供しました。

この報告書が、市民の皆様をはじめとして広く活用され、埋蔵文化財に対する关心と御理解を深めていただけ一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、御理解と御協力をいただきました地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成21年3月

多賀城市教育委員会
教育長 菊地 昭吾

例　言

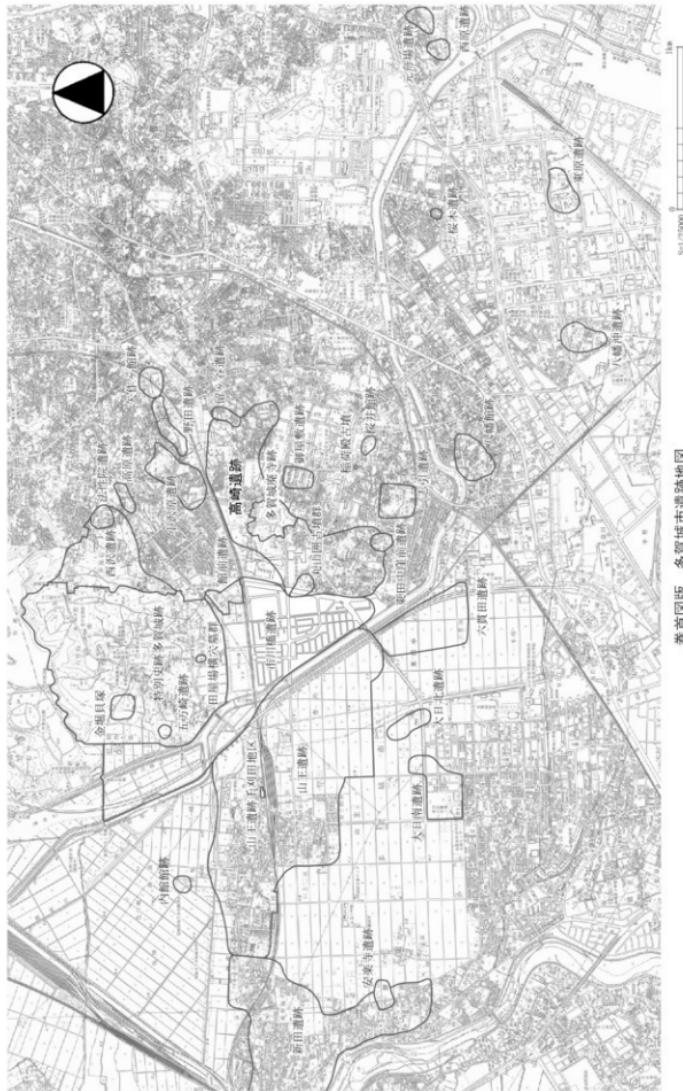
- 1 本書は、平成20年度に受託事業として実施した高崎遺跡第69次調査の成果をまとめたものである。
- 2 遺構の名称は、第1次調査からの連続番号である。
- 3 本書で使用した遺構の種類を示すアルファベット記号は以下のとおりである。
SI：堅穴住居跡　SD：溝跡　P：柱穴及び小穴
- 4 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書では過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。
- 5 奈良・平安時代の土器の分類記号は『市川橋遺跡—城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ』（多賀城市教育委員会：2003）に従った。
- 6 捜索中の高さは標高値を示している。
- 7 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を参考にした。
- 8 本書の執筆、編集は相澤清利が行った。遺構のトレース、図版作成は四家礼乃が担当した。
- 9 調査に関する諸記録及び出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　次

I	遺跡の地理的・歴史的環境	1
II	調査に至る経緯と経過	2
III	調査成果	5
IV	まとめ	8

調査要項

- 1 調　査　名　高崎遺跡第69次調査
- 2 所　在　地　宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目334-1の一部
- 3 調　査　面　積　136m²（対象面積167m²）
- 4 調　査　主　体　多賀城市教育委員会教育長　菊地　昭吾
- 5 調　査　担　当　多賀城市教育部文化財課長　佐藤　慶輝
- 6 調査担当者　多賀城市教育部文化財課調査普及係主任　相澤　清利
　　　　　　　　発掘調査員　四家　礼乃
- 7 調査協力者　鈴木あい子　日本住宅株式会社
- 8 調査従事者　阿部　信夫　大竹　利吉　小松　まり　今野　晃子　佐藤　昭護　佐藤　正　清水　亮
- 9 整理従事者　中村千恵子



卷首圖版 多賀城市遺跡圖

I 遺跡の地理的・歴史的環境

本遺跡は、市の東半部を占める標高30m以下の低丘陵西端部に位置し、特別史跡多賀城廃寺跡を取り込むように、東西約1.2km、南北約1.1kmの範囲に広がっている。この丘陵は、塩竈方面から本市北東部に至り、南側及び西側の沖積地に向かって枝状に派生している。このため、大小の谷が複雑に入り組んだ、起伏に富んだ地形を呈している。

本遺跡については、これまで多くの調査が実施されており、古墳時代から近世の遺構・遺物が発見されている。このうち特に注目されるのが、奈良・平安時代のものである。多賀城廃寺跡の南西200mに位置する弥勒地区では、掘立柱建物跡や堅穴住居跡が多数発見されており、出土した遺構・遺物（鉄製匙等）から多賀城跡や多賀城廃寺跡との関連が指摘されている。また、井戸尻地区では1,000個体を超す量の灯明皿が一括廃棄されており、周辺で万灯会などの仏教儀式が執り行われていたと考えられている。また、東側に隣接する留ヶ谷遺跡では、中世の館跡に伴う土塁や溝跡が発見され、近世にはこれを改修して武士の屋敷として利用したことが判明している。

なお、今回の調査地点については、多賀城市遺跡地図によれば東側の一部が隣接する留ヶ谷遺跡の範囲に含まれるが、今回は便宜的に高崎遺跡として報告する。



第1図 調査区位置図

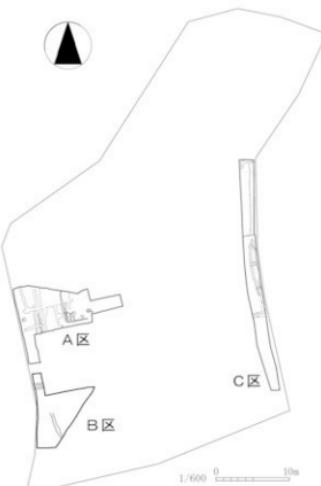
II 調査に至る経緯と経過

本調査は、共同住宅新築に伴う発掘調査である。平成19年5月14日、地権者より当該地区における共同住宅新築計画と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では現地表面に0.1～1.9mの盛土を施した後に、一部の建物基礎や駐車場、擁壁部分に掘削を伴うものであった。

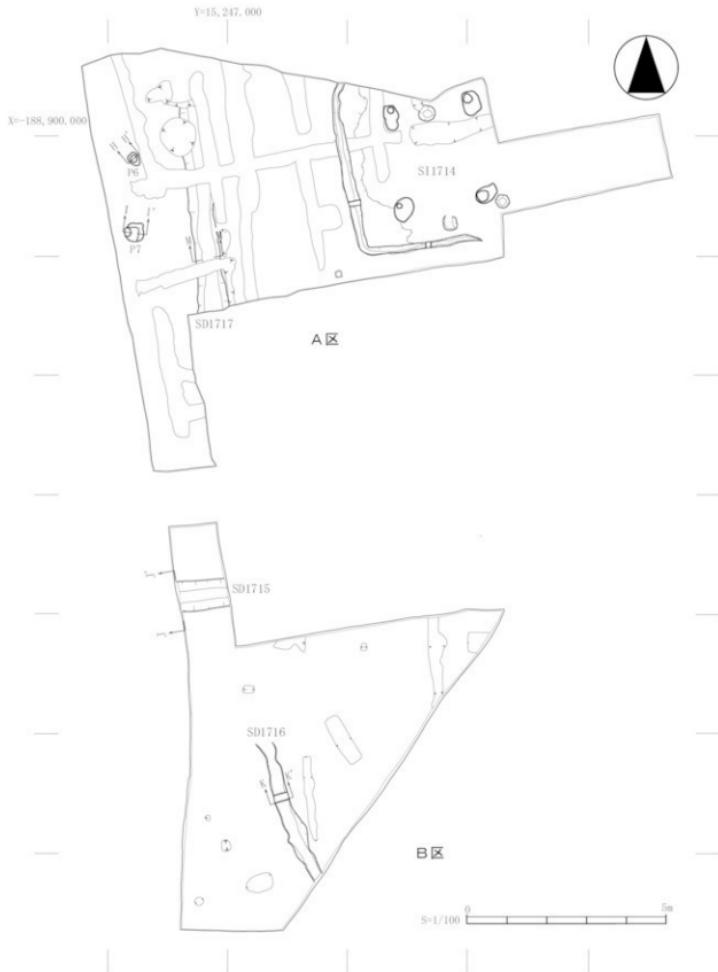
当該地周辺では、これまでの調査において古代から中・近世にかけての遺構・遺物が発見されていることから埋蔵文化財への影響が懸念された。しかし、遺構の分布状況が不明であったため、事前に確認調査を実施し、この結果を踏まえて本発掘調査の期間及び経費を積算することとなった。

確認調査は平成19年7月9日～25日に実施した。対象区内に9ヶ所のトレンチを設定し、そのうち5ヶ所で溝跡、土壤、柱穴を発見した。この結果に基づいて、地権者に調査期間及び費用を提示したところ合意が得られ、本発掘調査は平成20年4月から開始することとなった。平成20年4月1日、地権者より調査に関する依頼書と承諾書が提出され、4月3日に本発掘調査の委託契約を締結した。

調査は4月9日から着手した。調査区は西側の建物建築部分と擁壁造成で掘削される地点をA区、駐輪場と擁壁部分をB区、東側の擁壁部分をC区とした。はじめに重機を使用して表土(1層)の除去を行い、12日より作業員を動員して地山上面での遺構検出作業にとりかかった。A・B区とも搅乱溝が多数確認され、遺構面もかなり削平を受けていた。15日には測量基準杭の設定とC区の遺構検出作業も開始した。A区では堅土住居跡、溝跡、柱穴、B区では溝跡、C区では南北方向の溝跡を検出し、遺構埋土の掘り込み、平面・断面図作成、写真撮影の一連の作業を順次進めていった。これら各遺構の調査は、4月25日にはほぼ終了し、翌26日には補足調査と器材の撤収を行う。埋め戻しは5月7日に行い、現地調査を完了した。



第2図 調査区配置図



第3図 調査区平面図(A・B区)

遺構名	平面形	長軸×短軸×深さ(cm)	層位	土色・土性	出土遺物	備考
SI1714 P1	不整梢円形	63×38×37	1	にぶい黄褐色 砂質土		焼土・木炭粒・地山粒含む 柱痕跡
			2	にぶい黄橙色 砂質土		地山粒と黄橙色土がまじる 掘り方埋土
			3	明黄褐色砂質土		地山小ブロック主体、掘り方埋土
SI1714 P2	不整長方形	60×48×46	1	にぶい黄褐色 砂質土		木炭粒含む、柱痕跡
			2	にぶい黄橙色 砂質土		地山砂質土主体で、岩盤ブロックも含む 掘り方埋土
			3	明黄褐色砂質土		岩盤ブロック主体、掘り方埋土
			4	明黄褐色砂質土		地山砂質土主体、掘り方埋土
SI1714 P3	不整長方形	58×40×38	1	灰黄色砂質土	土師器壺 A類	地山小ブロックと褐灰色土がまじる 柱抜取り穴埋土
			2	暗灰黄色粘質土		地山小ブロックと褐灰色土がまじる 柱抜取り穴埋土
			3	明黄褐色砂質土	土師器壺 A類	地山土主体、掘り方埋土 均質、掘り方埋土
			4	灰黄色粘質土		
SI1714 P4	不整長方形	61×44×33	1	にぶい黄褐色 砂質土		木炭粒含む、柱痕跡
			2	明黄褐色		地山砂質土主体、均質、柱痕跡
			3	灰黄色砂質土		地山粒・木炭粒ふくむ、掘り方埋土
			4	にぶい黄橙色 砂質土		地山砂質土主体・均質 掘り方埋土
			5	黄褐色砂質土		岩盤小ブロック・木炭粒含む 掘り方埋土
SI1714 P5	不整円形	42×39×15	1	褐灰色土		木炭・焼土含む

第1表 S I 1714 穫穴住居跡柱穴等観察表

III 調査成績

1 発見遺構と遺物

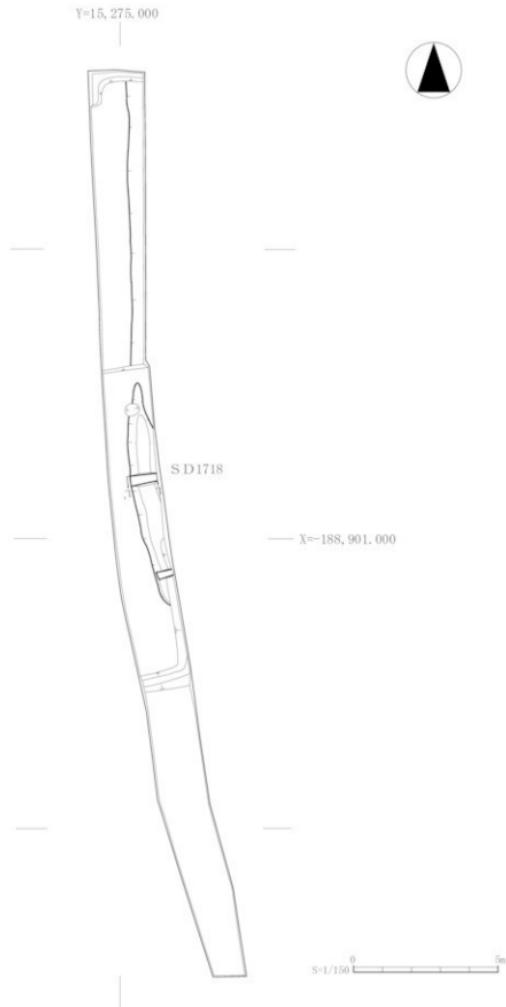
S I 1714 穫穴住居跡

A区東半部の地山面で発見した住居跡である。全体が削平を受けており、特に東辺付近が著しい。平面形は残存する部分と主柱穴の位置関係から正方形をなすものと推定される。方向は西辺でみると北で約10度西に偏している。規模は東西方向で3.1m以上、南北方向で4.35m以上、想定で一辺約5mとなる。壁は残存しておらず、床面も削り取られ凹凸が見られる。西辺付近には住居構築時の掘り方が認められた。周溝は外側に抉り込むように造られており、幅15～20cm、深さ3～20cmである。住居に伴うと見られるピットは5基検出された。このうちP1～P4は住居四隅の対角線上にそれぞれ位置することから主柱穴と考えられる。掘り方の平面形は、不整長方形もしくは不整梢円形で、長軸約60cm、短軸40cm、深さ



種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真 図版	登録 番号	備考
		外面	内面						
土師器・杯	SI1714 掘り方埋土	-	ヘラミガキ・ 黒色処理	(16.9) 7/24	(7.2) 9/24	3.7	-	R1	A類、内外面摩滅

第5図 S I 1714 穫穴住居跡・柱穴等観察表



第8図 調査区平面図(C区)

遺構名	平面形	長軸×短軸×深さ(cm)	層位	土色・土性	出土遺物	備考
P6	不整形方	35×27×8	1	灰黄褐色土		粘性あり、柱抜取り穴
			2	褐灰色土		地山小粒・炭化物混含む 掘り方理土
P7	隅丸方形	49×47×20	1	褐灰色粘質土		やや粘性あり、地山粒・小ブロック含む 柱抜取り穴、B期
			2	灰黄褐色砂質土		しまりあり、地山小ブロック含む 掘り方理土、B期
			3	褐灰色土		粘性・しまりあり 均質、掘り方理土、B期
			4	明黄褐色土		しまりなし、地山土主体 掘り方理土、A期
P8	不整円形	36×32×30	1	黄褐色土		地山砂質土と岩盤ブロックが混じり合う 人為的埋め戻し土

第2表 柱穴等観察表

IV まとめ

今回の調査では、堅穴住居跡1軒、溝跡3条、柱穴等3基を発見した。まず、S I 1714堅穴住居跡の年代について検討すると、掘り方理土から非ロクロ調整の土師器杯が2個体出土している。第5図は丸底風の旅部を持ち内湾気味に口縁にいたる。もう1点は図示できないが、やや平坦な丸底を呈し内湾気味に口縁にいたる特徴を持つ。ほかにこれも図示できないが、非ロクロ調整の土師器盤の破片もある。これらの特徴を有する土器群は、多賀城周辺では8世紀中葉頃の時期が与えられている山王遺跡第10次調査SD180B溝跡のものに最も類似している⁽³¹⁾。また、周溝埋土にはロクロ調整の土師器甕が含まれていた。ロクロ調整の甕は多賀城周辺では8世紀後葉には出現し⁽³²⁾、以後平安時代を通して主体となる。したがって、これらのことから本住居跡の年代は、8世紀中葉を上限とする古代の範疇で考えておきたい。SD1715溝跡からは埋土より陶器擂鉢の口縁部破片が出土している。口縁部には縁帯を形成し、赤灰色の鉄釉がかけられていることから、近世以降の堤焼であり、同溝跡もおよそその時期の遺構と推定しておく。

註1 この溝跡からは、天平12年(740年)から天平勝宝元年(749年)までのものと天平宝字7年(763年)と解説できる漆紙文書が出土している。

多賀城市教育委員会『山王遺跡－第10次調査概報－』多賀城市文化財報告書第27集 1991

多賀城市教育委員会『山王遺跡－第12次調査概報－』多賀城市文化財報告書第30集 1992

註2 多賀城市教育委員会『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ－』多賀城市文化財報告書第77集 2003

写 真 図 版



調査区遠景（北より）



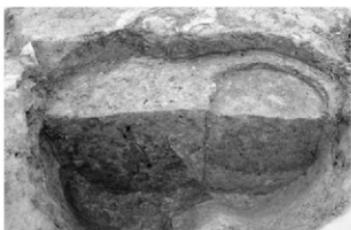
B区全景（北より）



C区全景（北より）



A区SⅠ1714竪穴住居跡(東より)



P1 半截状況



P2 半截状況



P3 半截状況



P4 半截状況

A区SⅠ1714竪穴住居跡柱穴



A区SⅠ 1714 竪穴住居跡検出状況(南より)



A区SⅠ 1714 竪穴住居跡(南より)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	たかさきいせき							
書名	高崎遺跡							
副書名	第69次発掘調査報告書							
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第97集							
編著者名	相澤清利							
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 Tel.022-368-0134							
編集機関	多賀城市教育委員会							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高崎遺跡 第69次調査	宮城県多賀城市 留ヶ谷一丁目 334-1の一部	042099	18018	38度 17分 51秒	141度 00分 28秒	20080409 ～0507	136m ²	共同住宅 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
高崎遺跡 第69次調査	集落・都市 城館	古墳～近世	竪穴住居跡、 溝跡	土師器	古代の竪穴住居跡を発見した。			
要約								

多賀城市文化財調査報告書第97集

高崎遺跡

—第69次発掘調査報告書—

平成21年3月31日発行

発行 多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368-1141
印刷 今野印刷株式会社
仙台市若林区六丁の目西町2-10
電話（022）288-6123



